

## 霧多布湿原ナショナルトラスト

—この湿原を子どもたちへ—

伊東俊和

ITO Toshikazu

NPO法人 霧多布湿原トラスト/事務局長



### 1 霧多布湿原

霧多布湿原は国内3番目の広さを持ち、高山植物に彩られ、花の湿原といわれるほどに美しい景観が身近に楽しめる湿原だ。その湿原はタンチョウをはじめとする多くの生き物たちの住処でもある。1993年にはラムサール条約にも登録された。

湿原の面積は3,168ha。しかしその約1,200haが民有地となっており湿原の周辺を囲んでいる。霧多布湿原を保全するという事は、この民有地を湿原の状態のまま残せるかどうかということにかかっている。

だが同時に湿原の周辺には漁師さんを主体とした生活がある。この湿原の保全は地域の生活との深い関わりを持たなければ進まない。ここで生まれ育ち、買い物や行き帰りにタンチョウを見ながら暮らしている人々にとっては、霧多布湿原は特別な存在ではなく、あってあたりまえのもので、敢えて守ろうとか、残そうという対象ではない。

しかし、『いつの間にか』という気づかない時間の中で湿原はすこしづつ埋めたてられ変わってきた。そういう

中で私たちの活動は始まった。

### 2 霧多布湿原トラスト

原生の自然をそのまま残そうというのであれば、人がいなくなるのが手っ取り早い。しかし現実はそのはいかない。人と自然がどのように折り合いをつけるかである。自然公園の中でさえも民有地が取り込まれているのが現状だ。これを守るといことは、人が自然をどう捉え、関わりをもつかということになる。行き過ぎは双方の存在を危うくしかねない。

守るといことは、その加減を見だし、互いが持続できる手法や取り組みを見いだすことだろう。

そこには『なぜ自然を守るのか』という自分への理由が必要になる。しかしそれは、地球環境云々とか明確なビジョンが必ずしも要るとはいえない。

ところが自然保護というと、普通の人に関わりがたいイメージがある。一部特別な思いを持っている人たちや、知識人の分野という感じがしてちょっと入りづらい。普通の人気が気軽に関われる、また関わりたくなるような自然

保護の形を模索した。

この町でいえば漁師さんや酪農家の人々の関わりが生まれるということだ。

#### 1 活動のスタンス

私たちが霧多布湿原の保全を呼びかけ始めてから20年になる。その間変わらずに私たちの取り組みの基本になっていたのが『霧多布湿原のファンづくり』ということだった。

自然の保護や保全といっても、相手は自然ではなく人間である。そこでこのような活動は、それを『どんなスタンスでやるか』が大事なことのひとつであるだろうと感じていた。

私たちは、『霧多布湿原が大好きだ』という人をたくさん増やしたいという趣旨でスタートした。好きな人ができると、その人のことが気になる。もっとよく知りたいと思ひ、仲良くしたくなり、たいせつにもなってくる。自然を守るということも、これと同じようにできないだろうかと考えていた。

理念ではなく『好きだから』ということに関わっていく。それが結局自然を大切にしてい残していくという結果につながっていく。そんなことから私たちの活動には、初めから『守る』ということばが使われることはなかった。また意識してその表現を避けていった。

『大切だから残そう』という形と『好きだから残したい』ということには、活動の中で大きな違いがでることがはっきりと見えた。結果は同じに見えても、その過程や関わりが全く違うように感じた。一言でいえば『関わりやすさ』ということだろう。

霧多布湿原トラストはいま会員が2,400人を越えた。保全面積も民間としては国内最大のナショナルトラスト団体となってきたが、その活動はゆるやかな霧多布湿原の『ファンづくり』のなかで培われてきたものだ。『好きだから』

ら』というだけで守れる自然があってもいい。

#### 2 パートナーシップ

多くのNPOにとって、その活動の元手になっているのは『こうしたい』という『思い』で、その運営に伴う『人・もの・金・・・』といった現実に必要なものについてはかなり心細い状況にある。

霧多布湿原トラストにおいても、その前身の『霧多布湿原ファンクラブ』がスタートした頃は同様であったが、私たちはその不足している部分を多くの支援者とのパートナーシップの中で補ってきた。そこには反対や対立からは生まれない協働の形が自ずと創られてきた。

#### <行政>

いま浜中町は、税制の面からも霧多布湿原トラストを支援している。湿原の保全のために霧多布湿原トラストが購入した土地に関する取得税などの税金を免除するなど制度面からの支援体制を行って来ている。

また、湿原の調査などの事業においても助成金で対応するなど柔軟な支援をいただいている。

そして私たちにとって、さらに大きな意義をもたらしている事がある。それは浜中町が行政として霧多布湿原トラストの団体会員となっていることだ。このことは、私たちのバックボーンとして対外的にも大きな信用をつくっている。

#### <地域>

以前、湿原の道路際にあるトラストの保全区間600メートルに木柵を設けた。その作業の中心となったのは、地元の建設業協会の人々100名ほどだ。さすがにプロの技術で、私たちだけではとうてい及ばない出来映えだ。日頃どちらかといえば、破壊、開発の代名詞のように捉えられる土建業の人たちが、私たちの活動をこんな形で応援してくれた。

こうして手を組んで行えたことは、ただ嬉しいばかりでなく、私たちの中に、これからの自然の修復や保全作業において土木技術の専門性が欠かせないことだという認識を生んだ。

#### <企業>

霧多布湿原トラストのホームページを見ると『私たちは霧多布湿原のナショナルトラストを応援します』というメッセージ広告が見られる。広告といっても実際にはその役割ではなく、それに見合う対価があるわけでもない。純粋に私たちの活動を応援しようという形で関わりをいただいている。

私たちのような市民活動が、事業をいい形で確実に進めていくために、こうした企業との関係や協力が欠かせないものになっている。



写真1 - トラスト標識



写真2 - 漁師さん 船



写真3 - 子ども ヤチボウス



写真4 - FAN木道作業



写真5 - スタッフ



写真6 - カヌー



写真7 - 湿原全景

### <パートナーシップ協定>

私たちは昨年セブンイレブンの基金と「パートナーシップ協定」を結んだ。これは特定した民有地の買上とそれを管理していくための協定で、それによってナショナルトラストの普及啓蒙を図ろうという長期の展望をもった協定だ。

民有地の買い上げにおいて、計画的な取り組みを安定して行う上で、こうした協定が結べたことは、私たちにとって、資金の裏付けのある戦略が可能となり、霧多布湿原のナショナルトラストの進展に新たな力を発揮することになった。

### <ファンクラブ>

平成14年末、東京に「霧多布湿原ファンクラブ」という勝手連が生まれ、『守るのは地元、支えるのは都会』という呼びかけで、霧多布湿原トラストの応援団が結成された。

「会員や資金は都会に暮らす我々が集めるから、湿原の保全は現地ですっかりやってください」という趣旨だ。平均年齢は60才を上回るが、集まったメンバーそれぞれが各々の分野のスペシャリストで、その知識や経験、人脈などは、私たちが望んでも得られるものではない。人生のキャリアが私たちのような市民活動に加わったとき、とてつもない広がりや効果を生み出すことを実感している。この力が一挙に霧多布湿原のナショナルトラストを前に押し出した。

また、学生のボランティアによる木道修復などのワーキングキャンプも毎年開かれる。

霧多布湿原の保全活動がこうしたパートナーシップによって進められていることが、霧多布湿原トラストにとっての大きな財産である。

### 3 ミッション

団体を運営していく上において、ミッションがとて大

事なものだとつくづく思う。それは羅針盤のようなものだ。活動をしていて、何かしっくりこないと感じたとき、いつもそこに戻れば、すすむべき方向や為すべきことが見えてくる。

私たちの活動は「この湿原を未来の子どもたちに」というミッションに向かっている。

私たちは、霧多布湿原トラストがなぜ生まれ、何をしようとしているのかをこの言葉で表した。

活動はそれを進めるうちに目的からぶれてしまうことがしょっちゅうある。おかしいなと感じたらこれに照らしてぶれを直す。その軌道修正の指針になるのがミッションだ。私たちはよくここに立ち返り、私たちが何のために今の活動をしているのか、現状を見直したり次の計画を考えたりしている。

また、ミッションには不思議な力がある。それはここに立ち返ると元気がでることだ。それはこの言葉を口にするニュアンスの問題かもしれないが、私たちに歯を食いしばる努力や頑張りよりも、楽しさを感じさせるからだ。「わかりやすく、元気が出るミッション」が、こんな会には必要なものだと言えながら実感する。

### 3 活動

霧多布湿原トラストの活動には3つの柱がある。これらを基に様々な活動を行っている。

#### 1 ナショナルトラスト

霧多布湿原保全の鍵を握っている周辺民有地。私たちは、これまでその民有地を借り上げるという方法で湿原の保全に努めてきたが、それは一時的な対応でしかないことは明らかで、将来に亘り霧多布湿原を残していくためには不安が残る。そこで私たちは2,000年に市民団体として法人格を取得し、「NPO法人霧多布湿原トラスト」として、霧多布湿原周辺を取り囲む民有地を買い

取り保全していくナショナルトラストをはじめた。

20年前には、「土地を貸して下さい」という私たちに警戒心を表していた湿原の地主さんたちも、これまでの活動やつながりの中で、私たちの目的とすることを理解していただいたようで、このナショナルトラストには好意的に協力を示してくれた。

霧多布湿原の民有地は約1,000haある。現在その4分の1を越える270haが霧多布湿原トラストが所有する保全地区になっている。

また、壊れた湿原を再生していくことも大きなテーマだ。現在その実験区を設け調査研究をはじめた。湿原の保全において、市民活動の広がりとともに湿原を科学的に捉えることが両輪といえる。

#### 2 環境教育(負の遺産から資産へ)

湿原の価値が見直されてきた。以前は大方の人にとっては作物もれず、利用も不便な無用の長物という存在であったというが、最近のアンケート調査によれば住民の半数以上がこの町の自慢として霧多布湿原をあげている。

地域に根ざして霧多布湿原の保全が進められるかどうかは、人々が湿原をどう捉えるかというそれぞれの価値観による。地域の人々が身近な自然に対する感心が深くなってこそ地に足のついたものになってくる。

霧多布湿原の保全が、行政や一部の活動の結果ということでは完成とは言えない。地域の人々に自らこの湿原を残したいという思いが生まれて、はじめて安定した保全ができあがっていく。その意味で自然環境の保全は地域の文化だと思う。ふだんの生活の中で湿原をどう捉えるか、どうつきあうか、その意識を育んでいくこと。それが根本的な保全の力だと思う。

霧多布湿原トラストではそれを目指して、地域や学校の中で様々な形の環境教育を押し進めたいと考えてい

る。エコツーリズムの普及に取り組んでいるのもその視点からだ。これまで負の遺産として捉えられていた湿原が「資産」として見直されるように。

#### 3 ファンづくり

霧多布湿原トラストを端的に表す活動が「霧多布湿原のファンづくり」だ。誰もが好きな人は大切に。それと同じように、この湿原を残していきたいと考えている。法の規制や反対運動ではなく、ここを好きだという人を増やしていく。それが結果として「北風と太陽」の童話のようになればいいなと思っている。

私たちは敢えて「人が快適に暮らすための」という視点で自然を捉えたいと思っている。

身近に豊かな自然があるだけで、どのくらい安らげる生活をおくれるか、心地よい気分ですごせるか、多くの人が体で知っている。

その心地よさを実感したり、思い出したり、そんな体験を霧多布湿原で味わってもらいたいと、いろいろなプログラムを提供している。そのことで霧多布湿原や身近な自然を好きになってもらえたらと思っている。

#### 4 私たちがめざすところ

私たちは自然保護もまちづくりの一つの手段だと考えている。

霧多布湿原があるから私たちはさまざまな恩恵に浴すことができる。未来の子どもたちに、また私たちが快適な暮らしを続けていくために、いま在る身近な自然がどういう状態になっていくことがいいのか、それを地域で考え、まちづくりの中で捉えていきたいと思う。そして『美しいのは霧多布湿原ばかりでなく、そこに住む人々の暮らしも、町並みも・・・』と言われるようにしたい。